

# 忘我の君

体験版

「最近、白澤さんが女の子とあんまり遊んでいないんですよ……」

桃太郎に相談をもちかけられ、鬼灯はその話の内容に眉をひそめた。

白澤は病的なほど女性が好きで、すぐ考えなしで連絡をとりつけてダブルブッキングどころかトリプル、カルテットブッキングなどという愚かな事をしでかしてしまうことも多々ある。そんな彼が、女性とあまり交友してないとは、かなり異常な事態だった。

「爺ですからね。そろそろ、性欲も減退したんですかね？」

「いや、どうなんでしょう……。それで、最近キモチワルイことに僕に優しいんです……」

それを聞いて、鬼灯はますます眉間に皺を寄せた。

白澤の元で住み込みながら薬剤の修業をしている桃太郎だったが、その月給は5万円。

衣食住が確保されているとはいえ、好待遇とは言えない環境だったが、最近給料がいきなり倍になって、接し方も随分優しいらしいのだ。

身体の調子はどうか、疲れているなら休めとか、進んで有効な生薬の作り方などを熱心におしえてくれたり、それはもう、天地が引っくり返るような可愛がりようなのだそうだ。

「よくしてくれるのはいいんですが、急にこうなって、なんだか気味が悪いッス……」

桃太郎がそう言うのも無理はない。

実は、鬼灯にも最近、白澤が妙になりつつあるのを感じ取っていた。

身体の関係はあるものの、基本白澤は鬼灯には辛辣である。

電話やメールがあっても、必要最低限の事しか会話しないし、悪態までついてくる。

その白澤だが、最近電話口でも妙に細やかで優しい。

第一、彼から連絡が入る頻度が明らかに増えているのだ。

鬼灯がかねてから欲しがっていた貴重な生薬の提供や、彼の体調を気遣う言葉……最初は皮肉か嫌味だと思っていたが、その声は明るくて裏表が感じられず、鬼灯も何度

「変なものを食べたか？」と尋ねたが、白澤は笑って否定するだけだ。

「まあ、丸くなったのは善いことではあると思いますが……」

しかし、鬼灯は物足りない思いをしている。

自分と対等な関係にある喧嘩相手がいなくなるのが、これほどつまらなくなるとは思ってもよらなかった。しかし、それと同時に気持ちの悪さも感じている。

無類の女好きで、男は「そこにいる」としか認識していないような男が、急に自分や桃太郎に注意を向けるようになった……

(また変な実験でおかしくなったんじゃないでしょうね……)

十中八九そうだろうと呆れながら、鬼灯は久々に桃源郷へと足を運んでみるかという気分になった。

夜も更けたとき、桃源郷の薬局・極楽満月に長身の黒い着流しを着た美影身が現れた。

「こんばんは……ああ、桃太郎さん」

「あ、こんばんは、鬼灯さん……。来てくれたんですね」

出入り口で出会いがしらにばったりと合い、互いに夜の挨拶を交わす。

「ヤツはどうなってます？」

「ええ……。やっぱり変わりないですよ。今夜も遊びに行かないみたいですし、熱心に薬の研究とかしちやってます」

「それは気味が悪いですね」

白澤のいつもの奔放ぶりからして、大よそ考えられない行動に、二人は額を突き合わせて会話する。

「ん？タオタローくん、どうしたの……。あ、鬼灯じゃん！」

生薬をアルコール漬けにする作業に没頭していた白澤が振り返り、鬼灯の姿を目にすると、気持ちが良いほど嬉しそうな笑顔を見せた。

その日ごろ向けられない笑顔を正面から見せつけられ、鬼灯の背中にぞぞぞ、と悪寒が走る。

白澤の笑顔は嫌いではないが、まさかこれが自分に向けられるとなると、話は別だ。

「随分と気持ち悪く仕上がっていますね・・・だいぶ変なものを口にしたのでしょう」

眉間に皺をよせ、鬼灯が吐き捨てるように言う。

「なんだよ、僕何か悪いことした？」

次の反応も、いつもの白澤とは違う。まるで叱られた子犬のようにしよげ返った声で言い継られ、ますます鬼灯の背中にさぶ疣がたった。

ゴン！

耐えられず、金棒で白澤をフットバス。

「はぐう！」

無様な声をあげて空中を地面と平行に飛び、壁にぶち当たって地面に転がり落ちた。

「気持ち悪いぞ偶蹄類」

成人男子では持ち上げることもできない金棒を、鬼灯は軽々と肩に担いで吐き捨てた。

「いたた・・・なんで暴力？なんか怒ってるの？」

その一撃を食らって、たんこぶ一つ程度のけがで済む白澤も、さすが神獣と言ったところだ。

普段の二人のこういうやり取りなど見慣れている桃太郎だが、いつもなら食って掛かる白澤の態度にやはり違和感、いや、気味悪さを感じる。

「ね、こんなカンジなんですよ・・・」

「は？こんなカンジってなんだよ。僕全然意味わかんないんだけど？」

二人の会話についていけない当人が、いじけたように文句を言う。

「とにかく、本人から詳しく話を聞いてみますか……。妙なものを食べたのなら、私ができるだけ、力づくでも治療に協力します」

「ありがとうございます……じゃあ、僕は今晚、シロたちに食事に誘われているので……」

本人たちは知らないが、桃太郎は二人の仲を密かに知っていた。

自分が対応するよりも、気心の知れた鬼灯と話し合う方が良いだろう、と氣を利かせ、桃太郎はさっさとその場を後にしようとした。  
が……

「え？シロちゃんたちと食事なの？僕聞いてないよ？」

そう言うと、白澤は立ちあがってズボンのポケットから札を数枚出す。

「ええええええええ」

「はいこれ。たまにはおごってあげなよ？犬との関係は、確固たる主従関係にあるからね。舐められると後が怖いよ……」



そう言いながら桃太郎に札を掴ませようとする。しかも、穢れない笑顔だ。

「いえいえいえいえ！いいです！ほんと、あの、井戸水でも十分ですから！俺ら！」

普段とは540度も違う白澤の態度に、桃太郎は全身へさぶ疣を立てて力いっぱい断り、そのまま逃げるように夜の桃源郷を駆け去って行った。

「・・・変なの・・・」

取り出した札をしまいながら、白澤がぼそりとつぶやくが、目の前の鬼神が反論した。

「いや、変なのお前だろ」

「え？僕？なんで？」

本人は全く自覚がないらしい。

鬼灯は一つため息をついて、金棒を傍らに立たせて、自分は手近い椅子に座る。

「とりあえず、話を聞きましょう。その態度はわざとですか？それとも、最近変わった出来事でもありましたか？」

「はあ？何それ。わざとってどういうこと？僕はいつも自然体だよ」

そう言って鬼灯の隣の椅子に腰かける。

「近い」

「えくそう？恋人同士なら、これが当然じゃない？」

今にも肩を組んできそうな距離に、鬼灯が自ら椅子ごと下がる。距離もそうだが、今白澤は何と言った？

恋人？

(へドがでる・・・！)

鬼灯は心底思った。

白澤に懸想しているのには変わりないが、なんだか今の白澤に言われると嫌悪しかわかない。こんな白澤らしくない言葉など、気分が悪いだけだ。

その考えに、鬼灯はふと思い当った。

(白澤さん・・・ではない？)

そうだ。目の前の男は、もしかすると白澤の皮をかぶった別人かもしれない。そう思えば、全ての事に説明がつく。

「あなた、一体誰ですか？」

「さつきから何言ってるの・・・僕は僕だよ。白澤。は・く・た・く」

そうやって鬼灯の手を取ろうとして、とっさに振り払う。

その直後の白澤のしよげた表情を見て、またぞつと悪寒が立ちそうになってしまふ。いつもとは真逆の反応を返す白澤に慣れず、鬼灯は身体ごと視線をそらせて言った。

「白澤さんに化けて、一体何をするつもりですか？そんなスケベ爺に成ったところで、何一つ得はありませんよ」

傍らにいらるであろう白澤らしきものに、鬼灯は無表情な声で訥々と伝える。

「化けるって・・・僕は僕だよ、お前さつきから何言ってるの？変だよ？」

「変なのはあなたです。さつさと正体を現さないと、金棒で私の気が済むまでブツ飛ばしますよ」

最近閻魔大王のお守でストレスも溜まっていますし、と付け加え、禍々しいオーラを放つ。

その気配にビク、と白澤が戦き、今にも肩を抱きそうだった距離から離れ、ようやく少し離れた。

「僕は僕だけど・・・じゃあ、何したら信じてくれる？」

「ふん・・・じゃあ・・・」

そう言うと、鬼灯は室内にある文房具を集め、白澤の前に突き出した。

「猫。描いて、具現化させてください」

「あー、お安い御用だよ！」

明るくそう言うと、白澤は差し出された筆を取り、意気揚々と紙に筆を走らせた。

「・・・!!」

その完成した「猫」の絵を見て、鬼灯は確信した。

「・・・あなた、やっぱり偽物ですね・・・!!」

「え・・・なんで？猫、ちゃんと描けてるじゃん」

「描けてるからおかしいんですよ！」

そう言うと、鬼灯は立てかけてあった金棒に手を伸ばした。ヒラリと地面に落ちたその紙には、誰が見ても立派に「猫」と認識できる絵が描かれている。

本物の白澤ならば、「呪いがかかったとしか思えない変な生き物」しか描かないはずだ。

「わーっ！待って待って！何すんの！だめだよ鬼灯！」

その途端、鬼灯の身体の動きが止まった。

何か目に見えぬ力が働いて、身体を動かすことができなくなっている。

鬼灯は思い当たるフシはあった。しかし、まさか術を使うセンスゼロの白澤に、できるはずがないのだ。

「あなた、まさか・・・」

眼球だけを動かして白澤を睨みつけると、視界には真面目な顔をして二本の指をこちらにかざす白澤がいる。

「悪いけど、動くのを禁じさせてもらったよ・・・僕の説明をちゃんと聞いてくれない？」

道教の坊主、道士が使う呪術の一つに「禁呪」というものがある。対象物に行動を禁じることによって、自然摂理をも軌返し、意のままに操る呪法だ。

この技を習得したものは、火に燃えることを禁じることも、水の流れを止めさせることもできる。当然、対象物を金縛りにすることも可能だ。

白澤は万物を知ると言われる、膨大な知識を持つ神獣だ。禁呪ぐらいお手の物だろうが、センスがゼロなので、こんな機転の利く使用方法を取れるハズがない。

(やはり、偽物確定ですね・・・！)

鬼灯が剛力で術を振り切ろうとしているのを感じ、白澤は慌ててまくし立てた。

「待て待て待てっ！話を聞けって！僕は本当に僕だ！そうだ、確かに僕はちよつと変わったなって自分でも思うよ、ほら、あのー、二週間前ぐらいからかな？女の子たちは可愛いと思うけど、なんだか急に火遊びする気にならなくなったんだよね！だってお金使ってああいふ遊びするなんて、なんだか不健全じゃん！そう思って止めたら、色々な事をサボってたって気が付いたんだ！ちよつと聞いている？だから！」





「・・・・・・・・」

金棒は白澤の三角布を奪い、頭髪を数本ひきちぎって薬棚に深くめり込んでいた。朝になって知るが、金棒は壁を突き抜け、半分外へ出ているという恐ろしい状態だった。

寸でのところで鬼灯の投げた金棒を交わした白澤の目の前で、鬼灯が床に倒れ伏す。

「うう・・・・・・・・」

床に転がった鬼灯からうめき声が漏れ、白澤は我に返ると、急いで鬼灯の元に駆けつけ、その身体を抱き起して顔を覗き込んだ。

「馬鹿だなあ・・・・・・・・無理矢理禁呪を解いた上に、あんな馬鹿力だしちや、そりゃ倒れるよ・・・・・・・・」

「触らないでください・・・・・・・・偽物・・・・・・・・」

力ない声で白澤に言うものの、今にも意識を失いそうで、そのいつもとは違う儂げな様子に、若干周囲の空気が変化する。

白澤は虚ろな目の鬼灯の顔を覗き込み、様子を確認する。  
顔色は少し青ざめているが、急を要するほど身体の状態は深刻ではなさそうだ。

体温が下がりかけている鬼灯の白い首筋に手を当て、顎を取り、そのまま鬼灯の小さな唇に口づけた。

「んぐ、んん・・・」

鬼灯は抗うように手でペチペチと白澤の頭を打っていたが、口づけが長くなると、それに比例して力を失い、白澤にされるがまま、口づけをし続けた。

分と表してよいほど長い時間口づけていただろうか。ようやく白澤が口を離れたとき、鬼灯は僅かに体力を回復させていた。

「神気だよ・・・分けてやるから、すぐに取り込んで活力にしろよ・・・」

再び口づけられて、鬼灯は与えられるがままに流れ込んでくる神気を享受し続けた。

(この感じ・・・白澤さん・・・だ・・・)

どんなに変化が達者でも、偽物に成り澄ますことができても、気だけは変えることはできない。

白澤の様子はこれまでのものとは全く違ってしまったが、流れ込んでくる神気は、最近ようやく感じ慣れ始めた白澤の神気に間違いなかった。

しかし、白澤の神気を受けるといことは、覚えのあるあの感覚がせりあがってくるわけで・・・

白澤は再び顔をあげて口づけを中断させて、鬼灯の顔色を伺った。

若干青白くなった白い顔に、筆で描いたようにそっぴり紅い唇。やつれたように額に張り付いた黒髪が扇情的で、いつもとは打って異なる弱弱しい様子に、白澤にも感情が押し寄せる。

「鬼灯・・・怒らないでよ・・・」

そう言うと、少し笑い、耳元で小さく

「・・・しなくなってきた・・・」

とささやいた。

その声を聞き、鬼灯はなぜか身体の中心を握られたような感覚に襲われた。  
白澤の欲情した声が、鬼灯の性感を響かせる。

(こ、こんなに色っぽい声してたか・・・?)

改めて聞かされる白澤のタラシ術に、鬼灯は戸惑いと疑念を持ちながらも、自分の感情を抑え、あくまで相手を探るといふ名目で

「私も・・・」

と、返答した。

白澤はすぐ鬼灯を横抱きにして抱き上げ、奥の寝室へと突き進んでゆく。

白澤と寝た回数は、「慣れた」と言っても良いぐらいこなしたというのに、寝室へ向かう間、白澤の腕に抱かれている鬼灯の胸は、まるで初夜の乙女のように不思議な昂ぶりを感じていた。

く中略く

「それでは本日はこれで終了します。お疲れ様でした」

そう言つて白澤など目にも入っていないようにスタスタと歩き、扉の取っ手に手をかけて帰ろうとする。

「ちよちよ、ちよつと待つて！僕も行くよ！」

鬼灯は明様に舌打ちをし、不機嫌を丸出しにして白澤を無視し、扉を開けて去つて行つた。白澤は慌てて荷物を背負い、鬼灯の後をつけてゆく。

普段の鬼灯ならば金棒で打ち据えて白澤を立たせなくしてやるところだが、今の白澤はハイブリッドだ。禁呪で怪力を封じられ、暴力を抑えられるのは、本日五回ほど経験している。

(全く、めんどろくさいですね・・・)

いまずぐ背後から駆け寄つてくる白澤を金棒で伸したい衝動に囚われるが、もうそれは効果的な方法ではないとわかっている。それならば、もっと効果的な方法で自分を諦めさせる方法がある。

少々あの人物に会うのは憂いがあるが、この際仕方がない。連絡を取ってこちらからつながってしまったのも珍しく、鬼灯はこの方法をとることにした。

「お前の部屋に入るのって初めてだっけ？いつも僕の部屋だもんね。どんな部屋なのか楽しみだよ・・・」  
間違ひなく部屋に入った後の事を考えているいかがわしい神獣へさらに苛立ちを募らせながら、鬼灯は自室へと向かってゆく。

「あれ？家じゃないの？寮？」

閻魔殿から出るでもなく、奥内の角を曲がってゆく鬼灯の後姿を負いながら、白澤が話しかける。やがて現れたのは、鬼灯の実を逆にした絵柄が描かれた扉だった。それは、鬼灯の黒い着流しの背中の絵柄と同じである。

「ここお前の部屋？仕事場と近いなあ・・・」

「そうです。出勤にも手間が省けますし、不測の事態が起こったとき、動きがとりやすいですから」

「えー？部屋で休んでるとき、仕事で呼び出しかされたらイヤじゃない？」

「私はそれが仕事ですから」

それに、あなたも店舗と住居が一緒でしょう、と言い置いて、鬼灯は自室の扉を開けた。すると中から光が漏れだした。主人のいない部屋をずっと照らしていたらしい。しかし、その中には主人とは違う人物が寝台の上に胡坐をかいて座っていた。

「良く帰った鬼灯。ねぎらってやろう。そして神獣。帰れ」

そう言ったのは、見事な男らしい体軀を鎧でまとった、長髪の美形だった。

「げ・・・エロ王じゃん・・・」

白澤は心底嫌そうな顔を隠そうともせず、その男と対峙した。すると鬼灯はその男の傍らに立つと、その逞しい体軀にしなだれかかる様にもたれ、言い放つ。

「わかったでしょう。私はこの方の所有物のようなものです。あなたの付け入る隙はありません」

寝台の上に座っている男は毘那夜迦（びなやか）王、もしくは聖天歡喜天とも呼ばれる神で、鬼灯が変哲もない鬼から鬼神に成ったとき、貢献した神である。

王が与えたのは鬼神の力、鬼灯が差し出したのは自らの肉体。

事情が長くなるが、とにかく王は鬼灯の後見人で、鬼灯の身体をいたく気に入っている。そして鬼灯も、この神の神気があれば健康を保てるのだ。

気まぐれだが鬼灯の身体をいつなんどきでも抱きに現れ、鬼灯の身体もそれに対して否応なく反応してしまふ。

「ほお・・・お前から自らを余の所有物だと宣言するとは、まこと珍しいことがあったものよ。そこな神獣は、よほど嫌われているとみえるな」

二人の様子をみて、白澤は歯を食いしばり、剣呑な目つきで歩み寄る。

「何しに来たんだよ？いつまでも執着してないで、いい加減に鬼灯を解放したら？」

今にも殴りかかりそうな勢いで王に顔を突き合わせ、白澤は睨んだ。しかし、王は飄々たる様子で、白澤の殺意など意に介さない。



「それは余の勝手だ。貴様に指図される謂れはないぞ……。それに、鬼灯もこのとおり……」

そう言つて鬼灯を膝の上に引き上げ、着物の合わせ目を割つて手を滑らせ、素肌に触れた。

「んっ……」

王に触れた部分は全て性感帯になつてしまふ鬼灯は、わずかな刺激でも快樂の反応を返してしまふ。

「このとおり、私は王の自由です……。はあ、ですから、諦めてください」

吐息交じりに言う鬼灯から抱かれる色香が漂い、無味簡素だった部屋が次第に情事の雰囲気へと転化してゆく。

「んぎぎぎ……！それぐらい……！」

白澤は鬼灯に肉薄すると、いきなり唇を奪つた。

「んんっ！」

鬼灯の引っ込もうとする舌を吸い上げ、顎の裏を舌先で撫で回し、齒列をなぞって舌の裏も舐める。

「んっ……ふ……」

興奮の唾液が分泌され始めたとき、王は口を笑いの形に歪めた。

「ほお、では、余はこうしてやろう」

王は鬼灯の着物に突き入れた手をさらに進め、胸の突起に触れた。

「ああっ……！ちよ、二人とも、やめてください、あっ！あっあっ！」

突起を指で弾かれて、快感が連続して背筋に迸る。それを見た白澤は、鬼灯の耳朶に舌を這わせてねっとりとした動きで責めにかかる。

「はあ、あっ！違、あ、こんな、ああっ！」

二人の取り始めた行動に、鬼灯は戸惑っていた。

彼の目論見では、仲の悪い二人を合わせればバトルが勃発し、自分どころではなくなるだろうという算段だったのだが、まさか自分の身体を取り合う事態になるとは思いもよらなかった。

「何が違う鬼灯。余とこの神獣、どちらの闘の具合が良いか、その身を持って証明するのだろうか？」

「そ、そうではありません！あなた、白澤さんに腹が立たない……」

腹が立つわけがない。王は鬼灯を完全に自分の所有物と思っているし、孤高の存在でこの性格だ。鬼灯が自分らしくもなく、目論見を誤ったと後悔したときには、もう遅かった。

「あぁっ！あっ！あぁあっ！や、止めて、くださいっ……！」

胸の突起を連続して弾かれこね回され、圧倒的な快感がせりあがり、とても声を抑えられない。よりによって白澤の前でこのような醜態をさらしてしまうなど、状況は余計に悪くなるばかりだ。

「ふん、それぐらいで鬼灯を所有者扱いなんて呆れるね。僕はもっとすごいよ？」

「ほう？では、してみよ。神獣」

そう言つて王は鬼灯を胡坐をかいた足の上に座らせ、白澤と対峙させた。鬼灯はいやな予感がしたが、上半身を巡る快感で何も考えることができない。

白澤は鬼灯の下半身に手を伸ばすと、着物の裾から手をつ突つ込み、そのまま奥へと進ませた。

「ちよ、ちよつと・・・！やめなさい！」

「いやだね。これがお前の企みなら、打ち破つてやるよ」

（こういう展開は望んでいないんですけれどっ！）

そんな鬼灯の心の叫びなど届くはずもなく、白澤は鬼灯の履いているステテコを脱がせ、着物の裾を大きく割つて生足を晒した。

「ああっ・・・！それ以上は許しません！」

「なに、余が許す。よいではないか、鬼灯。そなたが望んだのだろう？」

（だから望んでいません！）

胸を触られながら耳も舐められ、反抗する気持ちを瞬時に萎えさせられる。鬼灯の身体は、本当に王の責めに弱い。

「あっ・・・ああ、や、やめてくださいっ・・・！私は、このような・・・展開・・・っ」

白澤の手が鬼灯の美脚にかかり、内腿をさすり始める。王の愛撫で熱を帯びた身体はしっとり汗ばみ、白澤を勘違いさせるのに十分な威力を持っていた。

「そんなエロい声出して何言ってるの？僕と王の精比べでしょ？」

「だから、違うっ・・・！二人とも、やめ、あ、ああ、あっ！」

王に胸の突起を抓んで引つ張られ、鋭い快感が上半身を走る。白澤の繊細な動きの指が内腿を撫で回し、際どい部分に触れるか触れないかの調子で愛撫をしかけ、上と下の快感で鬼灯は言葉をまともに発することができなくなってしまう。

「あ！あああ、ちが、ああ、あつ！んぐうううつ！」

王の指が上下に素早く動いて連続して突起を弾き始める。一撃ごとに快感が蓄積し、どんどん身体が高まってしまう。鬼灯の身体が硬直して戦慄き、胸を引いて快感から逃れようとするが、王の指はどこまでも追ってくる。

「んんんっ！やめ、やあああつ！い、いつ……！」

キユウと突起を強く抓まれ、快感が一気に広がった。胸での絶頂が上半身全体を覆い、熱い湯を掛けられたかのような恍惚感に包まれる。あまりの快感に鬼灯の頭は真っ白になり、ただ身体全体を断続的に痙攣させるだけだった。

「あつ……ああ……あ……はあ……っ」

震える鬼灯の身体を後ろからかき抱き、王は胸全体を撫で回しながら耳元で囁く。

「ほら、もう極めたぞ。どうだこの淫蕩な顔……。お前ではこのような表情などさせられぬだろう？」  
ずっと性感帯を弄られ続け、絶頂からゆっくりと降りている快感の最中である鬼灯を、顎を掴んで白澤にその顔を向け、王は笑った。

「ふん、それぐらい、僕だってさせられるよ」

そう言うと白澤は太腿の最奥にある下着に包まれた自身を布の上から撫で上げる。

「ああっ！」

胸の絶頂ですでに体中が敏感になってしまっている鬼灯は、下半身も反応しきって、どんな微細な刺激でも愉悦に変えてしまう。

く中略く

「っ……っ」

ビク、と鬼灯の身体が揺れ、誰の目から見ても感じたということがわかる。

片方だけだった愛撫を両方に切り替え、白澤は複雑な指の動きで左右を責め始める。

ゾクゾクと我慢できない愉悦が背中に走り、鬼灯は大きな声を出して喘ぎそうになってしまいが、そこを口づけでふさがれて、なんとか車内の静寂は守られた。

白澤の舌が口腔に入り込み、上あごや歯列をゆっくりとなぞる。

同時に敏感な胸を指先で弾かれ、さらに白澤の膝が、さらに奥へ進んで鬼灯自身を強く押し続けている。

感じる部分を一度に責められながら、ここは公共の場だという鬼灯の常識がせめぎ合い、混乱状態になりつつあった。

「んっ……」



一旦口づけから解放され、息を付いた鬼灯の表情はすでに艶で色づき、日ごろの鬼灯からは想像もつかない蠱惑的な色香が流れている。

そんな鬼灯の様子を見て白澤は小さく笑い、さらに身体を密着させるようにして両足の間に膝を強く食い込ませた。

「んぐっ……！は、はあ、止めてください……こんな場所で……」

「じゃあ、ここじゃなかったらいいの？」

「っ……うう……」

ああ言えばこう言う……と鬼灯は心底で毒つきながら、この先の快感を期待してしまっている自分が無意識にいることは、完全に無視だった。

「お断わりします、今日は、あなたとはしません……」

(こんな場所で行為を仕掛けてくる男になど……！)

相手に対する無礼行為への怒りが、身体で感じる快感を若干上回った。常人ならばとつくに白澤の絶技に陥落しているはずだが、人一倍感じやすい身体だというのに、鬼灯は耐えて見せた。

「そう？じゃあ、やめるね・・・」

最後に軽く口づけ、白澤は鬼灯から身体を離すと、鬼灯の開脚された両足を閉じ、着物の裾も襟も直しておとなしく座らせた。

「術・・・解いてください・・・」

「いやだよ。ここで解いたら、お前に何されるかわからないもんねー」

「うっ・・・このゲス・・・!」

鬼灯の身体は中途半端に火をつけられたまま、そのまま目的地に着くまで放置される。

しかしやめろと言った手前、この熱を収めてくれなどと言えるわけがなく、ましてやこんな場所で自分から慰めようとすることもできず、鬼灯は付けられた体内の火を鎮火させるのに意識を集中させる。

「ねえ、鬼灯・・・最後までしてほしい？」

心の中を見抜かれたような白澤の言葉に、鬼灯の心が揺らぐ。

（してほしい）

図らずもそう強く思ってしまった瞬間、先端から淫液が零れて下着が濡れる感触を知覚する。

「すごい淫気がお前から漂っているよ・・・このままじゃ辛いでしょ？」

「うっ・・・辛くありません、いい加減に放っておいてください、っていうか術を解け！」

白澤に下着ごと自身を掴まれ、快樂の電流が背筋に走り、鬼灯は声を失ってしまう。

「・・・・・・・・っ!!」

「ふふ、すごい反応……。かわいいなあ」

白澤に耳を舐められながら、鬼灯は巧みに動く白澤の指に堪えられない愉悦を感じてしまう。

「はっ……。は……。あ……。」

自分でも思わず声が漏れ、白澤の都合の良いように展開が動いてしまうのを悔しいと思いつつながら、身体の内熱を止めることができなかつた。

「一回イッとか？」

そう言われて、はい、と言える鬼灯ではない。それをわかっていながら、白澤は掴む器官をさらに激しく揉みこみ始める。

「んんっ……。あ、ああ……。！」

「素直じゃないなあ……。」

鬼灯の下着をずらせて裸の自身を露出させ、白澤はその先端に唇を当てた。

「……………っ!」

(こ、こんな場所であんなことを……………!)

しかし、鬼灯の身体には待ちに待った快感で、体中に愉悦が伝播し、声を抑えるのに精いっぱい背徳感  
は薄れてしまっていた。

「ふふ、こんな場所ですからいいんだよ……………これから列車に乗る度、このことを思い出してくれると  
いいな、鬼灯……………」

そう言って鬼灯自身を根元まで飲み込み、巧みな舌づかいで表面を舐め回す。

「うっ……………!うう……………っ!」

声を出して暴れ出したいぐらい気持ちいいが、身体を動けなくされている上、やはりここはそのような行為に及んではいけない場所だと意識が立ち、声と反応を抑えてしまう。その分、身体感覚は鋭敏になってしまい、白澤の舌の動きがより鮮明に鬼灯に快感となって伝わってくる。

「あっ・・・やめ、止めてください・・・！」

しかし止める声は艶に濡れ、とても心から制止を願う声ではなくなっている。

(するなら早く終わらせてくれ・・・！)

止めることは諦め、鬼灯はそのまま白澤にされるがままになっていた。しかし、白澤は鬼灯自身の根元を舌でしつこく舐め、最も触れてほしい、感じる部分へは触れず、焦らしを決め込んでいる。

「んんっ・・・」

自分から快感を乞うことなどできるはずもなく、鬼灯はただ一方的に与えられる快感に耐えるしかできなかった。

感じる裏筋を舐めたかと思うと、また根元への刺激へと移る。さらに陰囊にまで舌を這わされ、快感をとことん焦らされ、鬼灯は荒く息を漏らした。

白澤に自身全体を飲み込まれ、急に激しく吸引され、快感が一気に弾ける。

「んんんっ・・・！」

しかし、すぐにその動きは止められ、また焦れた責め方をされてしまう。

(こ、このような生殺し・・・！)

しかし鬼灯から急かせる言葉をいう事はできない。

そのまま一気に激しく責めてくれたらどんなに心地よく絶頂できるだろうか、と鬼灯は不覚にも夢想してしまい、そのせいで身体が熱くなり、そのせいで精神的にも自分の首をしめてしまう。

そんな時、左斜めにある電車のドアがいきなり開き、そこに業務員が立っていた。

「切符を拝見いたしますー、ご協力おねがしいたしますー」

そう言つて車両の奥に向かつて声を放ち、最前列に座っていた鬼灯と白澤に気付いた。



続きは製品版でお楽しみください

